Japanese Association for Religious Studies

内在的超越の宗教観
――東アジアの宗教との対比において――

高坂史朗

西田幾多郎の『場所的論理と宗教的世界観』には「宗教は何処までも内在的に超越的でなければならない、逆に超越的に内在的でなければならない。内在即超越、超越即内在の絶対矛盾的自己同一の立場に於て、宗教と云ふものがあるのである」と述べられている。ところが、その書の結論においては「私は将来の宗教としては、超越的内在より内在的超越の方向にあると考えるものである」とする。

西田の「一即多、多即一の矛盾的自己同一」という相互限定の用語は『無の自覚的限定』の時期、弁証法神学者の「自己」と「他者」ないしはそれを成立せしめる「絶対者」とのあり方によって導かれ、『哲学の根本問題』『哲学の根本問題続編』においてヘーゲルの弁証法を批判した「個物と個物との相互限定」の場所的限定が考えられるのである。この「一即多、多即一」という西田特有の相互限定で重要なことは相互に対立するという点であり、相互に限定しあうという点である。また一方からの方向と同時に逆の方向からの限定性が同時的であるという点でもあろう。

「内在的超越、超越的内在」という言葉は宗教と文化の形態を明らかにしようとする文脈で登場する。『善の研究』「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」「哲学論文集第二」「哲学論文集第三」の諸論文に挙げられるが用語としては一定しない。ただ「宗教の立場から云つて居るのではない、何処までも歴史的形成作用の論理的分析から云つて居るのである」という言葉は重要である。この書で「内在的超越」が登場するのは、ドストエフスキーの「大審問官」の議論としてである。神なき時代のキリストの復活である。キリストは「無言なる」故に啓示的ではなく内在的であると西田は言う。しかし私はこの西田の内在的という論旨を「神なきところに真の神を見る」という点に置く。そしてこの書の意図は内在的超越の仏教の立場を論じるのが目的ではなく、内在において超越を見、超越の立場に内在性を見る相互限定性が主題である、と考える。つまり「歴史的世界は、絶対現在の自己限定として、いつも内在即超越、超越即内在的であるのである。かかる世界に沈心して、その歴史的課題を把握するのが真の哲学者の任であろう。」

西田は大乗仏教を通して「東洋文化」を見ているが、中国人の宗教的意識を仏教で代表させることはできない。また道教（神道）・仏教・儒教の精神的要素を日本と同じように議論することには無理がある。朝鮮の宗教事情も同様である。

仏教・日本精神を議論するとき鈴木大拙の『浄土系思想論』と務台理作の『場所の論理学』が西田の念頭にある。務台理作は「日本思想には日本的論理がある。」それを現代の意義と学問化しなければならないと主張する。さらに鈴木大拙の「浄土経思想論」は広範な宗教的射程から日本的霊性を明らかにする。しかしそれは偏頗な日本主義ではない。「日本だけは」で

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

はなく、日本的な宗教意識・宗教心理がどうしてこのようになってきたかを説きほぐしてゆく。また、それぞれの国の仏教を日本の物差しで測ることは誤っているという。鈴木大拙と比較すれば明らかに西田のそれは視野が閉ざされている。仏教自身も自己否定を必要とする。そうでないと「娑婆が浄土を映し、浄土が娑婆を映す、明鏡相照らす」とはならない。それは「明鏡」であっても鏡に過ぎず、真の実在の像は失われてしまうのである。西田の「内在的超越」の一方だけの主張には疑問が残る。

パネルの主旨とまとめ

藤田正勝

西田幾多郎は、その初期の思索から晩年に至るまで、宗教の問題に深い関心を寄せていた。たとえば『善の研究』では宗教は「哲学の終結」であると言われている。しかし、そのように言われるとき、「宗教」のもとに何が理解されていたのかは明らかではない。もちろん、一方では仏教やキリスト教への深い理解と共感が語られているが、しかし他方、そのような現実の宗教に対する根本的な批判もまた語られている。そして宗教のあるべきあり方についてさまざまな観点から語られている。本パネルでは、そのような仕方で語られた西田の宗教理解の全体像を浮かび上がらせるとともに、それが有する意義と問題点とを明らかにすることをめざした。

小坂国継は「西田幾多郎の宗教思想の特質」と題した提題において、西田幾多郎が生涯を通して探究したものが、自己とその根源、およびその関係であったこと、そしてその関係が最終的には、絶対矛盾的自己同一的関係として、つまり、内在的なものが超越的であり、超越的なものが内在的であるという関係として捉えられたこと、その点でキェルケゴールの思想との近さが見てとれること、しかしそれにも拘わらず両者の間に相違が存在することを明らかにした。

浅見洋は「西田の宗教思想とキリスト教的終末論」と題した提題を行ったが、とりわけ「終末論」の概念に注目し、西田の理解が「現在」ないし「瞬間」の意味を強調する「現在的終末論」という性格をもつこと、それに対して現代のキリスト教では、終末が、将来する希望の出来事として語られていることを論じた。

井上克人は「西田哲学と禅仏教」と題した提題において、西田の禅理解が、一般に言われるように、臨済・白隠系統の禅よりも、むしろ荷沢神会や圭峯宗密ら荷沢宗の禅につながること、それは、西田のなかに「超越的なもの」への志向があり、その内在と超越の論理の究明に関心が向けられていたことによることを論じた。

高坂史朗は「内在的超越の宗教観」という論題で、西田が、「内在的超越と超越的内在」の絶対矛盾的自己同一において宗教が成立すると考えていたこと、しかし「将来の宗教」は「内在的超越」の方向に見いだされうると考えていたことを明らか

NII-Electronic Library Service